『フィルムライブラリーを作ろう』一九四九年（日本映画教育協会）

映画教材を教育に！

中央教育研究所　矢口　新

映画幻燈は教材として教科書と同等或はそれ以上の価値をもっている。所がこれまでの教育では教材といえば読物である所の教科書しか考えられていなかった。これはただ旧教育の慣習に従ってそう考えているだけであって、新しい教師の自覚ある態度ではない。

新しいカリキュラムを現実に生かすために現場の教師が具体的になすべき事は児童生徒がどういう学習活動をするかということの指導と計画である。児童や生徒が学習活動をするときに働きかけるものはすべて教材であるが、この教材が従来の様にただ読物だけしかないというような考え方では新しい教育は現実化しない。

教材として最も価値高いものは、児童生徒の現実の環境である。この現実の環境の中から問題を探し、その環境を分析し、それに働きかけて現実を改造していく所に真の学習がある。現実の環境は第一義的教材である。そういう現実の環境の中から問題を探し、これを分析し、働きかけるためには、いろいろな参考材料がいる。即ち自己の現実的環境を見、働きかけるための眼を養い、態度をつくる教材が必要である。ここに読物や映画幻燈が登場してくる。

読物や映画幻燈は現実を整理して構造づけて見せてくれるものであり、これを参考として自己の現実の環境を自己の眼で見ることが出来るようになるのである。現実を見る目を養い、現実に働きかける態度をつくるものとして読物と映画幻燈はそれぞれ特殊性があって、映画幻燈は教科書にない独自の表現力をもっていることは誰も認める所である。現在の教科書にある内容を映画幻燈で表現したならば、その内容の半分以上が、もっと効果的に、もっと確実に表現されるであろう。そうなれば教科書はまた異なった方向にその独自性を発揮することになろう。

新しいカリキュラムを現実に生かすために考えられねばならぬ最も具体的なことは教材の問題であるにかかわらず、現在行われているのはただカリキュラムの構成表ばかりを作っている事である。ただ教師が頭の中で観念的な教育内容を考えているだけである。これでは新しいカリキュラムを現実に建設することは出来ない。現在最も大切な事はこれらの教材の管理の問題をもっと真剣に考えることである。

教材の管理の問題から映画幻燈を眺めてみると、これらは何れもただ娯楽的なもの、或は課外活動の材料程度にしか考えられて居らず教育の本格的教材として管理されるに至っていない。ここに教育が現実的に発展しない大きな理由がある。

読物参考書を多数そろえて図書館や学級文庫を作ると同じように映画幻燈の教材が、学校にそなえつけられて、児童生徒が自由にこれを使いこなすようになる体制を一刻も早く考えなければならぬ。映写機やフィルムは読物に比して多少費用はかかるけれども、それは個人的なものでなく、共用のものであるから児童生徒一人宛の費用にすれば読み物と大差はない。要はそういう考え方が学校教育者の中にあるかどうかの問題である。

映画や幻燈のライブラリーをそなえつけるためには教育者及び児童生徒の共同が必要である。若し近所の学校十校位が一単位となって一組のライブラリーを備えつけようとするならばきわめて少ない費用で実現するであろう。現在の理想として映写機が各校に一台、ライブラリー十校に一個位は欲しいものである。

ここへ向かって教育者が計画的な努力をすることこそ新教育実現の最も大切な仕事であろう。